

## かんわ Letter vol.4 July.2014



こんにちは、緩和ケア普及室です。梅雨が明け、気温は30度を超える日々…熱中症にならないように室内でも水分補給が必須です。以前、長くお子さんの入院に泊まり込みで付き添われていたお母さんが「あつつい日本茶が飲みたいな…ペットボトルじゃなくて。」と話されていたことがあり、こっそり休憩室のポットでお茶をお出しするととても喜んでくれたのを思い出します。お茶の香りにこどもも「はあ〜久しぶりのにおい！」と家の雰囲気を出した様子でした。イギリスのホスピスでは、患者さんや家族のお話をうかがう時に紅茶を出すところもあるそうです。日常の些細なこと、あたりまえのことは心を和ませてくれるものですね。

さて4人目のメンバー紹介は、あつついのは苦手なベイリーと、あつつい心を秘めている森田優子さんの登場です。



森田優子ハンドラーとベイリーです。

みなさんこんにちは。いつもベイリーを可愛がっていた  
だき、ありがとうございます。ベイリーがこども医療センタ  
ーに着任し、2年が経ちました。たくさんの人に愛情を注  
いでいただいているおかげで、ベイリーもすっかりKCMCに慣れ、仕事が終わってからも病院  
から帰りがらなくて困るまでになりました。

私も以前、小児専門病院で看護師をしていました。看護師から今のハンドラーという仕事  
に変わり、当時よりも子ども達やご家族の生の声が聞こえるようになった気がします。看護師  
時代には、「そんなの仕方がない」と思っていたことも、仕方がないことではなかったのだな…と

思うことが多々あります。子どもが採血室で泣いたり、泣きながら手術室へ入っていたり、そし  
て子どもが泣いている姿を見て家族も涙を流していたり。泣いて当たり前ではなく、その苦痛  
を少しでも減らしてあげる努力もある。そして、その努力をしようとする姿勢が医療スタッフにあ  
るかどうか、それはご家族には直に伝わっているのだなと気づかされています。

ある病棟に長期入院していて亡くなられたお子さんのお母様から頂いたメールに、こんな言  
葉がありました。「こども医療センターは、決して辛く悲しい場所ではなく、家でした。彼女に対  
して本気で怒って、本気で喧嘩してくれる人もいました。入院中の子たちは、闘病しているだ  
けで、ただの子どもなんですよね。」スタッフが本気で子どもに向き合くと、亡くなった後にも、K  
CMCを温かい【家】と感じられるんですね。子ども達にとっての【家】だから、闘病中だから仕  
方がないとか、楽しいことがなくて仕方がないわけではないんですね。闘病生活の中にも、ち  
よっと楽しいことや、ちょっと嬉しいことを作ってあげたいと思っています。

「ベイリーが来て病棟に笑顔が増えたよ」と言って頂いています。スタッフはベイリーに触って  
はいけないと思われる方もいらっしゃるようですが、そんなことはありません。医療スタッフの  
みなさんが笑顔になることも、子ども達とご家族にとっても大切なことだと思います。

緩和ケアサポートチームの一員として、子どもたちにとっての【温かい家】作りに、少しでも力  
添えてきたらよいな、と思っています。何でもお気軽に声をかけてくださいな。

お問い合わせ： 緩和ケア普及室 柏木順子【PHS5984】

